

好きな詩を選んで、
暗唱しよう

風 まで・みちお

糸のありつたけを のばすと

風は とおく

切手に なって

空に はりついた

たえまなく

天地をゆすぶる 低いつぶやきが

とめどもなく 大きくなってくる

どこへなのだ

この空を

宇宙のどこへ送りつけようというのだ

と 問いつめようとするかのように

父や母を はなれて

今 ここで

こんなに ぽつんと

ひとりぼっちでいる ぼくを



頭と足 まで・みちお

生きものが 立っているとき

その頭は きつと

宇宙のはてを ゆびさしています

なんおくまんの 生きものが

なんおくまんの 所に

立っていたと しても・・・

針山に さされた

まち針たちの つまみのように

めいめいに はなればなれに

宇宙のはての ぼうぼうを

けれども そのときにも

足だけは

みんな 地球の おなじ中心を

ゆびさしています

おかあさあん・・・

と 声かぎり よんで

まるで



とりかえしの つかない所へ

とんで行こうとする 頭を

ひきとめて もらいたいかのように

一年間で十の課題、好きな詩を選らんで、…なのに、
すべてを暗唱する人、本当に頑張って練習したことが
発表の様子から伝わる人、忙しい時間のすき間を見つ
け校長室に来る人など。私にとって、皆さんの時間
は、至福の時でした。そして、皆さんの練習している
様子を想像することも、大きな楽しみであり、喜びで
した。ありがとう。

令和二年 金森孝子